
✂腕斬り乱次✂

梅ヒロ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

×腕斬り乱次×

【Nコード】

N2497B

【作者名】

梅ヒロ

【あらすじ】

時は江戸時代…。平和な町は、突如現れた片腕の人斬りによって変わり始める…。

壱ノ巻『鳴神町』

時は江戸時代。

月が照らすこの『鳴神町』は至って平和である。

私はこの町の奉行所に務めているのだが…。ここ数年、悪事らしい事が起こった試しがない。

今日の夜の見廻りも、何事もなく終わるだろう。手に持った提灯をユラユラと揺らしながら、町の裏通りへと入っていった。

提灯があるとはいえ、時刻は丑三時過ぎ。提灯が照らすのは、精々二、三步先までである。

こんな時間に歩き回ってる物といったら、猫か鼠かな位で、虫の鳴き声さえしない。

あまりの静けさに、背筋が震える程である。

土を踏む足音だけが響き、提灯の灯りだけが辺りを照らす。

そんな時であつた。

目の前に人影を見付けたのである。

こんな時間に人がいるなんて滅多に無い事なのだ。となると、当然怪しい人物という事になる。

「あんた…こんな時間に何してるんだ？」

聞いても一向に返事がない。暗くてよく姿が見えないが、人である事には違いないだろう。

提灯を突きだしながら、そいつに近付いた。灯りがそいつの姿を照らした。

背丈はそれほど大きくなく、肌の色は透ける程に白かった。

髪は伸ばし放題のボサボサで、着物も至る所が破けている。

そして…左腕が無かったのだ。

通す腕が無い袖は、ユラユラと風に揺れ…

もう片方の腕はというと、腰に差した刀を愛しそうに触っているのだ。

「格好からして…あんた武士じゃないだろう？刀を持てるのは…」

全く聞く気配もなく、それどころか何やらブツブツと呟いてる様である。

『…デ…ク…』

異常である事は疑いようがなかった。いつ襲ってきてもいいように身構える。

『…デ…クレ』

「くれ…？何を…」

『ウデヲクレエー！！』

そいつの姿が消えたと思うのと同時に、腰の辺りに強い衝撃を感じた。

「ぐっ…」

どうやら体当たりされたらしい。気付いた時には地面に尻餅をついていた。

『ウデエ…モラッタア！』

振り上げた右腕には、月灯りを浴びて光る刀が握られていた。

勢いよく振り下ろされた一撃は、地面に放り出された私の左腕を確実に捉えている。

—ジャリッ…

間一髪でその一撃を避け、奴の刀が地面に突き刺さっている間に体勢を整える。

腰に差したままの刀を抜き、次の一撃に備える。

『ウガアアア！』

狂気じみた奇声を発しながら、こちらに突進してくる。

互いの刀がぶつかり合い火花が散る。

相手は右腕一本の筈なのに、圧倒的にこちらが押されているのだ。

「くうう…化け物かよ…」

伸び放題の髪ごしの眼は、まさに鬼の様であつた。

『シネエ…！』

物凄い力で私は弾き飛ばされ、民家の壁に叩きつけられた。

頭を強く打ったのか、意識が朦朧として立ち上がる事さえできない。

奴はそれを知ってか知らずか、勝ち誇ったような顔でゆっくりと近付いて来る。

『モラッタア…』

左腕に強烈な痛みを感じると、遂に意識は途絶えた。

式ノ巻『甘味処』

— 生きているのだろうか… 私は？

奴に襲われた後、意識を失って…。

ゆっくりと目を開け、辺りを見渡す。どうやら天国ではないみたいだ。

そこは見慣れた町の診療所の一室のようで、私は布団の上に寝かされていた。

窓から差し込む光は優しく、鳴神町に朝の訪れを伝えている。

窓の外の様子を見ようと立ち上がろうとするのだが、上手く立ち上がれない。

ふと左腕に目をやると、そこには在るべき物が無く、包帯が“切口”に巻かれているだけであった。

昨日の出来事はやはり、夢などではなかったのである。私の左腕は奴に切り落とされ、奪われたのである。

あまりの絶望感に床の上に倒れ込むと、声にならない鳴咽を漏らした。

「あつ… 乱次さん！」

聞き覚えのある声だ。ドタバタと私の方へ駆け寄って来たと思うと、

床に倒れ込んだ私は布団の上へと引きずり戻された。

「これでよしと…。寝てなきゃ駄目ですよ？怪我人なんだからあ。

」

「……」

「あれっ…喋れなくなったのですか？乱次さん…自分の名前は分か
りますよねえ？」

「齋藤乱次だ…。」

「正解！じゃあ私の名前は？」

「…綾女。」

「お見事！なんだあ…大丈夫そうですね。」

目の前にいる娘とは長い付き合いなのである。

私の親友が営んでいる宿屋があるのだが、彼女はそこに住み込みで
働いているのだ。

なんでも…両親が早くに亡くなったそうで、身寄りのない彼女を哀
れに思い、引き取ったというわけである。

最初の内は、誰に対しても心を閉ざしたままで、無口だったのだが
…。

今では…まるで九官鳥のようなお喋りへと変貌してしまったのであ

る。

小さい頃から彼女を見ている私としては、大変嬉しいことではあるのだが…。

「あの…左腕…痛くないですか？」

「ああ…たまに痛むが…大丈夫だ。」

「お医者様、呼んできますね！」

バタバタと駆け足で部屋を出ていく。

彼女がいなくなると急に部屋が静かになった。

朝日が部屋全体を包み込み優しく輝いている。鳴神町が今日も平和である事を思わせるのと同時に、昨夜私の身に起きた事を揉み消そうとしている様にも感じられた。

「先生！早くこつちに！」

廊下から、この診療所には不釣り合いな程の馬鹿でかい声がする。

ドタバタと綾女が部屋の入り口にやって来た。

「お医者様、連れてきたよお！」

背中には、その『お医者様』がおぶられている。

私の側に、どっこいしょと『お医者様』を置くと、綾女もその場に

腰を下ろした。

「先生！乱次さんは大丈夫なんですか？」

怒涛の勢いで、医者に問掛ける。

医者はと言うと至って落ち着いた感じで、私の方を向きながら話し始めた。

「あなた…この娘に感謝しなくちゃいけませんよ？あなたが倒れているのを発見したのは、この娘なんですからね。」

「そうなのか…？」

綾女は照れているのか、頭をボリボリと掻きながら答えた。

「えへへ…実はね。あの夜、寝惚けて裏通りをフラフラと歩いてたのですよ。それで偶然、腕から血を流した乱次さんを見つけて…。」

「もう少し発見が遅れていたら…出血多量で死んでましたよ。」

もしかしたら死んでいたかもしれない…。その言葉に背筋が寒くなつた。

そうになると綾女には感謝しなければならない。

「綾女…本当に有り難う…」

照れているのか、先程にも増して凄い勢いで頭を掻いている。

「い、いやあ…本当に偶然なんだし…。まあ、そこまで感謝したいって言うんなら…、『甘味処』のぜんざい（大盛り）でもご馳走になろうかな…。」

『背に腹は替えられぬ』ならぬ『腕にぜんざいは替えられぬ』か…。

「もちろんだ…幾等でもご馳走してやる。」

本来は安静にしていなければならぬのだろうが…。寛容なお医者様で、笑顔で外出を許可してくれた。

綾女と言えば、“おめかし”するために一旦宿屋に帰宅。

数十分後、『甘味処』の前に現れた綾女の変貌ぶりには驚かされた。

「ぜんざいが食べられるなんて、滅多にない事ですからね！気合い入れて食べなくちゃ。」

その後、ぜんざいを食べながら綾女は『ぜんざいの歴史』だの、『ぜんざいに対する礼儀』などを延々と語り続けていた。

そいつった話を軽く聞き流しながら外を眺めていると、父と息子が楽しそうに笑いながら歩いているのが見えた。

『鳴神町』は今日も平和なようである。

参ノ巻『奉行所』

さて…左腕の傷口が塞がるのにも、そう時間はかからず…

“腕”という産まれて以来の相棒がいなくなった生活にも慣れ始めた頃…

「こらあ！また自分で食べようとしてえ…。ほらっ、私が食べさせてあげるから！」

「いや…別に大丈夫なんだが…。右手だけでも食べれるし…。」

「大丈夫じゃない！さっ、口開けて！アーンして！」

…といった具合に、綾女が宿の仕事そっちのけで世話をしてくれているのだ。

ちなみに怪我が治るまでの間、私の親友であり…綾女の働く宿屋を営んでいる『平八』が宿の一室を提供してくれたので、有り難く使わせてもらう事となった。

後で聞いた話だが…部屋を貸してくれるよう、綾女が平八に頼み込んだらしいのである。

全く、余計なお世話である。診療所でも十分だったのに。

大体、こんな男の世話をする暇があるのなら…、そろそろ恋の一つ

でもしたらどうなのか…。

案の定、器量だけは良いのだし。整った顔立ちに一際大きな瞳、後ろで結った黒く長い髪に色白の肌…。

黙ってさえいれば、男の一人や二人は簡単に落ちるはずだ。

まあ…まだ齡二十にもなっていない小娘だし、放っておいても心配はないだろう…。

「なんですか？さつきから私の方ばかり見て…。顔に何か着いてます？」

「いや…その…。そろそろ腕も良くなってきたし…奉行所の方にも行かないとなあ…なんて…。」

そうである。『あの日』以来、一度も私は職場である奉行所に顔を出してないのだ。

一応、平八には言伝てを頼んでおいたのだが…。

自分で行こうと思えば、行けた筈である。

が…どうにも、綾女が部屋から出してくれない。

（怪我が治るまで…この部屋からは一步も出しませんよ！）

…などと言われた日には、素直に『はい』と答えるしかなかった。

綾女の顔を窺いながら、外出の許可を待つ。

「…いいですよ。じゃあ、着替え持ってきますね？あつ、髭も剃らないといけませんね！そんな顔じゃ…笑われますよ？」

クスクスと笑いながら立ち上がると、部屋の外にある階段を降りていった。

そんなに可笑しいだろうか？自分の顔の下半分が髭で覆われている様を想像してみる。

……剃らなきゃ。

—1時間後。

宿屋『平八』の前にて、久しぶりに外の空気を吸う。

綾女も一緒に来る気まんまんだったが、どうやら平八に宿屋の番を頼まれたようである。

「さて…行くか。」

昼の鳴神町は一段と賑やかだ。

道の両脇には様々な種類の店が並び、数えきれない程の人で溢れ返っている—

はずだった。少なくとも私の知っている『鳴神町』はそうであった。

店の大半が閉まっており、人の往来もほとんど無い。

今、目の前にあるのは本当に『鳴神町』なのであろうか。

たまに通り過ぎる人達が皆、私の方を睨み、何やらブツブツと言いながら去っていく。

正直、あまり気持ちの良いものではない。足早に奉行所へと向かった。

奉行所の門には一人、見知った顔が立っていた。

「長い間すまんかったな…龍。」

芹沢^{せりざわ}龍^{たつ}。奉行所で働く同僚である。髪はボサボサで身なりはアレだが…なかなか頭の切れる奴だ。

「構わんよ。それより…腕はどこにやったんでえ？」

ニヤリと笑いながら、私の顔を見る。

「平八から聞いている筈だろう？十日前に、訳も分からぬ奴に襲われて…」

「へえ…襲われて…。くくく…」

「何が面白いんだ…？」

「何がって…知らないのかよ？ここ最近、町で起きてる事件。」

「事件…？やっぱり何かあったのか？」

「異常な人斬りがこの町にいるみたいでね…。そいつに会ったら、斬られるんだよ…腕が…バツサリと…。今までで十人がやられてる。」

…奴だ。この左腕を奪った奴の仕業に違いない。

「斬られた奴の大半は死んでんだけど…。助かった奴に話を聞いたら、口を揃えてこう言っただって…。」

“左腕の無い人斬りにやられた”ってね…。」

「私もだ！夜中に見廻りをしていたら、そいつに襲われて…！」

「で…この腕斬りの被害が出始めたのが、ちょうど十日前…。あんたが“襲われた”日も十日前…。」

「私を疑ってるのか…？言っておくが、私は被害者だ！斬られてるんだぞ…実際に！」

着物の袖を捲り上げ、短くなった左腕を芹沢の前に突き出す。

「最悪、自分で切り落としたとも考えられるんだわ…。あとね…あんたが“襲われた日”に実はもう一人、腕斬りに遭っててね…。その死体の近くに…コレ落ちてたんだってさ…。」

芹沢は『奉行所』と書かれた提灯を私に見せた。所々、血の跡で汚

れているようだ。

「これは…あの日の…。」

「あの日、夜の見廻りをしてたのは…あんただけでしょ？」

絶対にやってない…絶対に。しかし…目の前には私が『やった』という証拠がある…。

「…と、まあ…素人の俺がいくら推理したって所詮そこまでだ。最後に裁くのは、お奉行様よ。」

「私は、どうすればいい…。なあ？」

いつの間にか芹沢の肩を掴み、必死の形相で迫っていた。

「まあ…家に帰って、頭冷やせや。それでも自分はやってないと思うなら…また俺の所に来いよ。」

「おかえりなさい、乱次さん！どうでした？怒られませんでした？」

「ああ…上の部屋借りてもいいか？」

「いいですけど…。もしかして…まだ腕が痛みます？お医者様呼び

「ましようか？」

「――バタンッ……」

部屋の中は、窓から差し込む夕焼けで染められていた。

外から子供達のはしゃぐ声が聞こえる。

「やゝい！そんな事してたら『腕斬り乱次』に腕斬られるぞ！」

「お前が斬られるんだよ、ばか！」

二つ並んだ声は、遠くの方へと走っていき、やがて聞こえなくなつた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2497b/>

✂ 腕斬り乱次 ✂

2010年10月9日05時27分発行